

## 長期戦略:テーマ 「カリキュラムの基本構造の改革」

担当部署

## II.実施計画帳票

長期戦略テーマの責任者 (統轄部署)	宮田教務機構長 (教務機構)	実施計画の 担当部署	教務機構(TFダブルチャレンジ制度)
-----------------------	-------------------	---------------	--------------------

## 1. 実施計画

実施計画(タイトル)	取組開始	達成状況 確認年度	学部・研究科での 取組み有/無	帳票
1-(3)-③ (SGU1-1) (SGU1-1) インターナショナルプログラム(派遣・融合)	2014年度	2023年度	必要なし	不要
<b>内容</b>				
<p>「インターナショナルプログラム」は、「ハンズオン・ラーニング・プログラム」「副専攻プログラム」とともにアウェイチャレンジのプログラムとして、新たに導入する教育OSである「ダブルチャレンジ制度」の大きな柱のひとつである。</p> <p>コンセプトは、「日本(ホーム)を出て、世界(アウェイ)を知る」。①日本人学生の海外留学、②外国人留学生の受け入れ、③本学学生が受入留学生とフュージョン(融合)して学び合う、という3つに分かれているが、本学学生にとっては海外派遣プログラムとフュージョン(融合)プログラムがダブルチャレンジ制度の対象である。</p> <p>海外派遣プログラムについては、(SGU2-1-1)「協定校への海外派遣数 2500人」、(SGU2-1-2)「学部・研究科での派遣プログラムの開発」を参照。</p> <p>フュージョン(融合)プログラムについては、(SGU2-2-1)「受入留学生数 1500人およびフュージョン(融合)の推進」および(SGU2-2-3)「学部・研究科での受入・融合プログラムの開発」参照。</p> <p>「フュージョン(融合)プログラム」では、「日本の伝統文化」、「日本の現代社会・文化」、「日本の現代経営・労働環境」等の多様なテーマを受入留学生とともに日本人学生が学べる講義と各種施設での体験実習を組み合わせた正課科目の設置を目指す。受入留学生は、日本人学生のサポートも受けながら、より正確で高度な日本に関する知識・教養を学べるようになる一方、日本人学生は外国人から見た日本像の現状について深く理解することが可能となる。</p>				
進捗状況を測る 指標	指標名	定義・算式		
指標1	インターナショナルプログラム	当該年度の卒業生のうち、インターナショナルプログラムの単位を取得して卒業した学生数(実数/延べ人数)		

目標1国際プログラム&lt;指標1&gt;当該年度の卒業生のうち、国際プログラムの単位を取得して卒業した学生数(実数/延べ人数)

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
目標	—	—	—	—	—	—
実績	777人/ 848人	903人/ 991人	845人/ 1015人	868人/ 1035人	1092人/ 1354人	1166人/ 1589人
	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度以降	—
目標	—	—	—	—		
実績						

## 2. 実施計画:ロードマップ

		2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
国際プログラム	策定段階					
	2021年3月末段階					
		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
	策定段階					
	2021年3月末段階					
		2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	—
策定段階						
2021年3月末段階						
		2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
融合プログラムの開発	策定段階					
	2021年3月末段階					
		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
	策定段階					
	2021年3月末段階					
		2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	—
策定段階						
2021年3月末段階						

## 3. 実施計画:費用計画・人員計画

【費用・人員を必要とする理由】

非公開

## 4. 進捗状況・得られた成果

2016 年度	<p>■インターナショナルプログラム 本施策は、タスクフォース(派遣)を中心に具体的なプログラム(コンテンツ開発等)が検討されている。全学科目・プログラムとしての提供枠拡大に関する検討は進んでいるが、2500名の送り出しを実現するには、各学部における多様なプログラム開発と学生の送り出しが必要となる。なお、ダブルチャレンジ制度の2016年度修了者数は845名(前年度903名)となっている。</p> <p>■融合プログラムの開発 本施策は、主に CIEC を中心としたインドネシア交流セミナー、CCC 関連科目といった既存科目、一部学部での協定大学との隔年交流プログラム等に留まっている。 この後、量的に拡大させ、融合の機会を増やしていくには協定大学等の学生が「英語で」、「日本文化や日本の経営」等について学ぶ機会、来学中の交換学生と本学学生が共に「英語で」学ぶ科目等を提供していく必要がある。</p>
2017 年度	<p>海外派遣プログラムについては、(SGU2-1-1)「協定校への海外派遣数 2500 人」、(SGU2-1-2)「学部・研究科での派遣プログラムの開発」を参照。 フュージョン(融合)プログラムについては、(SGU2-2-1)「受入留学生数 1500 人およびフュージョン(融合)の推進」、(SGU2-2-3)「学部・研究科での受入・融合プログラムの開発」参照。なお、ダブルチャレンジ制度の 2017 年度修了者数は 868 名(前年度 845 名)となっている。</p>
2018 年度	<p>海外派遣プログラムについては、(SGU2-1-1)「協定校への海外派遣数 2500 人」、(SGU2-1-2)「学部・研究科での派遣プログラムの開発」を参照。 フュージョン(融合)プログラムについては、(SGU2-2-1)「受入留学生数 1500 人およびフュージョン(融合)の推進」、(SGU2-2-3)「学部・研究科での受入・融合プログラムの開発」参照。なお、ダブルチャレンジ制度の 2018 年度修了者数は 1092 名(前年度 868 名)となっている。</p>
2019 年度	<p>海外派遣プログラムについては、(SGU2-1-1)「協定校への海外派遣数 2500 人」、(SGU2-1-2)「学部・研究科での派遣プログラムの開発」を参照。 フュージョン(融合)プログラムについては、(SGU2-2-1)「受入留学生数 1500 人およびフュージョン(融合)の推進」、(SGU2-2-3)「学部・研究科での受入・融合プログラムの開発」参照。なお、ダブルチャレンジ制度の 2019 年度修了者数は 1166 名(前年度 1092 名)となっている。</p>
2020 年度	

## 5. 今後の課題及び方向性

2018 年度	海外派遣プログラムについては、(SGU2-1-1)「協定校への海外派遣数 2500 人」、(SGU2-1-2)「学部・研究科での派遣プログラムの開発」を参照。 フュージョン(融合)プログラムについては、(SGU2-2-1)「受入留学生数 1500 人およびフュージョン(融合)の推進」、(SGU2-2-3)「学部・研究科での受入・融合プログラムの開発」参照。
2019 年度	海外派遣プログラムについては、(SGU2-1-1)「協定校への海外派遣数 2500 人」、(SGU2-1-2)「学部・研究科での派遣プログラムの開発」を参照。 フュージョン(融合)プログラムについては、(SGU2-2-1)「受入留学生数 1500 人およびフュージョン(融合)の推進」、(SGU2-2-3)「学部・研究科での受入・融合プログラムの開発」参照。
2020 年度	海外派遣プログラムについては、(SGU2-1-1)「協定校への海外派遣数 2500 人」、(SGU2-1-2)「学部・研究科での派遣プログラムの開発」を参照。 フュージョン(融合)プログラムについては、(SGU2-2-1)「受入留学生数 1500 人およびフュージョン(融合)の推進」、(SGU2-2-3)「学部・研究科での受入・融合プログラムの開発」参照。
2021 年度	海外派遣プログラムについては、(SGU2-1-1)「協定校への海外派遣数 2500 人」、(SGU2-1-2)「学部・研究科での派遣プログラムの開発」を参照。 フュージョン(融合)プログラムについては、(SGU2-2-1)「受入留学生数 1500 人およびフュージョン(融合)の推進」、(SGU2-2-3)「学部・研究科での受入・融合プログラムの開発」参照。
2022 年度	

## 6. 学院総合企画会議の基本方針

2014～2018 年度	—
2019 年度	—
2020 年度	—

## 7. Total Review の結果

## 【フェーズ I (2019～2021)】

レビュー結果	可否	備考 (継続:「フェーズ II に向けた課題」 廃止:その理由と今後の方向性)
SGU 参照	<input checked="" type="checkbox"/> 継続 ・ <input type="checkbox"/> 廃止	SGU 参照

## 【フェーズⅡ(2022～2024)】

レビュー結果	可否	備考 (継続:「フェーズⅡに向けた課題」 廃止:その理由と今後の方向性)
	継続 ・ 廃止	